

中国における学士課程教育の評価について

—高等教育質保証の重要な手段—

田 氷雪* 著

劉 念才** 著

黄 福涛***・李 敏**** 訳

学士課程教育に対して評価を実施することは中国の高等教育の質を保証する重要な手段の一つである。1985年に公表された「中国共産党中央の教育体制改革に関する決定」（中国語：《中共中央關於教育体制改革的決定》）の中で、「高等教育機関の運営レベルに対する評価」という表現が登場されており、「教育管理部門が教育分野、知識分野と人事部門を召集し、高等教育機関に対して定期的に評価を行うべき」と述べている。それ以来、中国の学士課程教育に対する評価活動は次第に規範的な軌道に乗せてきた。本稿では、中国の普通高等教育機関における学士課程教育に対する評価の沿革、評価機構とその機能、評価指標システム、評価プロセスと結果、評価の効果、および改善すべき課題などについて紹介する。

一、中国の学士課程教育に対する評価の沿革

1985年11月に、元国家教育委員会が「高等教育のエンジニアリング分野に関する評価の研究及び試験的実施についての通知」（中国語：《關於開展高等工程教育評估研究和試點工作的通知》）を頒布した。これを契機に、一部の省・市および関係中央省庁が高等教育機関の運営レベル、専攻、カリキュラムに対する評価活動を試験的に発足した。1990年に、元国家教育委員会が「普通高等教育機関の教育に対する評価に関する暫定規定」（中国語：《普通高等学校教育評估暫定規定》）を打ち出した。その中で、高等教育評価の性質、目的、ガイドライン及び方法などについて明確に規定した。これは中国における最初の高等教育評価に関する法規となっている。系統的に大規模な学士課程の評価を開始したのは、1994年の初頭のことである。

学士課程教育に対する評価の変遷からみると、高等教育機関の学士課程教育に対する評価は主に三つの段階を経験した。第一段階は、1994年から始まった「合格」評価である。この評価は主として1976年以後に新置された歴史が短く、しかも運営基盤が弱い高等教育機関を対象に行われたものである。こうした機関を国家が定めた基本的な設置基準と質の基準に満たさせ、各大学の運営方針をより明確化させるうえで、教育の管理レベルも向上させるということに目的がある。評価を受

* 上海交通大学教務処・教育建設と質量管理弁公室主任／上海交通大学高等教育研究院博士後期課程

** 上海交通大学高等教育研究院院長・教授

*** 広島大学高等教育研究開発センター教授／比治山大学高等教育研究所客員研究員

**** 広島大学高等教育研究開発センター研究員

ける機関は元国家教育委員会によって指定された。当時、延べ 192 校がその評価を受けた。第二段階は、1996 年から始まった「優秀」評価である。その対象となったのは、歴史が長く、大学の運営基盤が堅実している教育レベルの高い機関である。評価を通して、こうした機関の教育改革をより深化させ、各校の特色を全面に打ち出し、レベルをさらに向上させるということを狙っている。評価を受ける機関は、各機関が自ら元国家教育委員会に申請することによって決められる。第三段階は 1999 年から始まった「ランダム」評価である。上述した 2 種類の評価に含まれていない高等教育機関を対象に、教育部がランダムに実施する評価のことを指す。

2002 年より、教育部が上述した 3 種類の評価を統合して、現在の「普通高等教育機関の学士課程教育に関する評価の実施プログラム(草案)」(中国語:《普通高等学校本科教学工作水平评估方案(試行)》)を正式的に発足させた。評価の結果は優秀, 良好, 合格と不合格という 4 段階評価となっている。

2003 年 8 月 20 日に、当時の教育部長である周済が、「今後の五年の間に、教育活動に関する評価を全国すべての普通高等教育機関に拡大させ、また五年おきの教育評価システムを確立させる」ということを発表した。同年、教育部が打ち出した「2003-2007 年における教育振興行動計画」(中国語:《2003-2007 年教育振興行動計画》)の中で、五年おきに普通高等教育機関に対する評価を実施するということを明確に言及している。2004 年 8 月に、教育部高等教育教学評価センターが正式に設立された。五年おきの評価システムの確立および評価センターの設置は、中国における高等教育に対する評価活動が規範化, 科学化, 制度化と専門化という段階に邁進したことを意味する。2008 年 6 月までに(2003 年の 42 の機関も含む), 589 の普通高等教育機関が教育部の評価を受けることになった。

二、中国の学士課程教育に対する評価の機構及び機能

学士課程教育に対する評価を統一的に管理するのは、教育部である。しかし、実際評価活動を実施するのは「普通高等教育機関の学士課程教育に対する評価専門委員会」であり、それをサポート

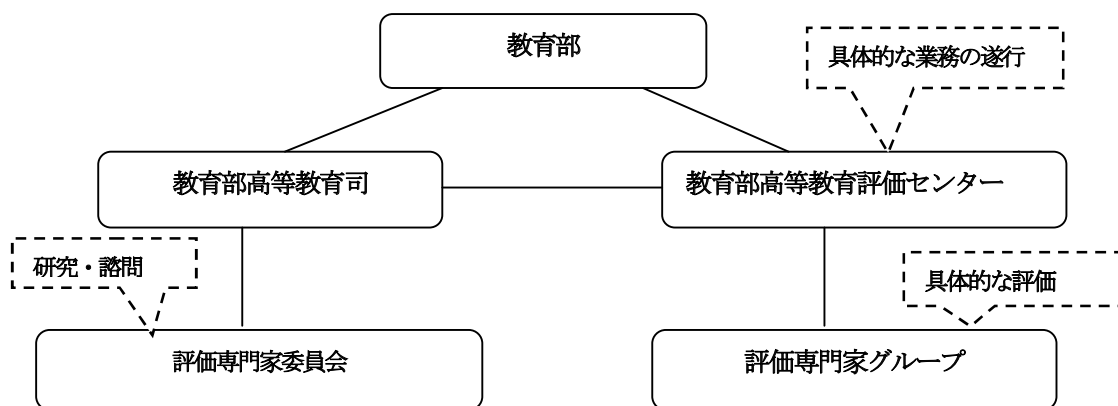


図 1 高等教育機関における教学評価の組織図

するのは高等教育機関の担当部門と地方政府の教育管理部门である。1994年に設置された教育部高等教育評価センターは、教育部に直轄され、独立法人資格を有する行政事業部門でもある。評価の実施期間中、同センターは具体的な評価に関する業務を遂行する。評価専門グループは、約9～13名の教育専門家、各専門分野の専門家と教学管理専門家から構成されている。評価を受ける予定の各機関の特徴に基づき、教育部が各グループの責任者とメンバーを招聘して任命する。高等教育機関における学士課程教育に対する評価の組織図は図1の通りである。

表1. 中国の普通高等教育機関における学士課程教育に対する評価の指標システム

順番	一級指標	二級指標
1	運営指導思想	1.1 機関の役割の位置づけ 1.2 運営指針
2	教職員構成	2.1 教職員の人数と構成 2.2 主要な担当教員
3	教学条件とその使用	3.1 教学に関する基本施設 3.2 教学経費
4	専攻建設と教学改革	4.1 専攻 4.2 カリキュラム 4.3 实践教学
5	教学管理	5.1 管理スタッフ 5.2 質のコントロール
6	学習の雰囲気	6.1 教員の模範 6.2 学習の雰囲気
7	教育効果	7.1 基本理論と基本技能 7.2 卒業論文あるいは卒業設計 7.3 思想道德教養 7.4 体育 7.5 社会名声 7.6 就職
	特色項目	

注：太字部分が重要な指標である。

三、学士課程教育評価の指標システム

2004年8月に、教育部办公厅が「普通高等教育機関の学士課程教育に関する評価の実施プログラム（草案）」（中国語：《普通高等学校本科教学工作水平评估方案（试行）》）を頒布した。2006年9月に、教育部が一部の重点大学、及び体育系・芸術系大学に対して、評価指標の調整と内容の充実などの修正を行い、評価指標の実行可能性を一層高めた。学士課程教育の評価案は、評価の目的に基づいて設定されたものである。その具体的な評価指標は、一級指標7項、二級指標19項、観測ポイント44項、さらに特色項目1項目が設定されている。実施プログラムは、定性分析と定量分析の両方を評価に取り入れ、学士課程教育の各内容をすべて包括するように設計された。一級指

標と二級指標の内訳は、表1のように示されている。各二級指標の中にさらに数項の観測ポイントを設定している。評価はA、B、C、Dの4段階で実施される。

四、中国の学士課程教育の評価プロセス及び評価結果

学士課程教育の評価は大学による自己評価、専門家による現場評価及び学校による自己点検という三つの段階からなっている。大学による自己評価は教育部が専門家による現場評価の日期が決まった時点からスタートして、専門家による評価の開始を以て終了する。専門家による現場評価期間は、大学に到着した時点から評価終了後学校から離れる時点までの期間を指している。さらに、自己点検期間は専門家による評価が終了してからの一年間を指している。

自己評価は、評価の中で最も重要な一環ともいえる。これは「評価を以て建設を促進し、評価を以て改革を促進し、評価をもって管理を促進し、評価と建設を結合して、建設をより重視する」（中国語：“以评促建，以评促改，以评促管，评建结合，重在建设”）という評価の原則をよく反映したからである。その基準に基づいて適正な評価を実施できれば、教育建設、教育改革、教育管理などの多角の面を通して、大学教育の効果、特色を掘り出すことができるだけでなく、その不足を析出することも可能である。したがって、大学による自己評価は大学自身の発展のために生まれた自主的評価ともいえる。

専門家による評価は全部で7日間にわたって実施される。評価のプロセスは、以下の通りである。まず、大学による自己評価の報告書を査読する。そのうえに、教育管理に関する資料の抜き取り検査、インタビュー、座談会を行うほかに、授業参観、教室・実験室・図書館・体育館などの施設の見学、さらに学生の基礎能力の評価などの評価項目を実施する。こうした多種多様な方法を通して、大学に対する客観的評価を下すことを目指している。このようにして、専門家たちは、評価を通して大学の教育及び管理に関する問題点を洗い出し、その改善策を大学側に提案して、大学の更なる発展に貢献するのである。

専門家による評価の次は、自己点検の段階に入る。大学側は、専門家の意見をもとに、改善計画を立ててから教育部に提出する。その後の一年間の期間において、問題の改善に取り組む。一年後、その改善の結果を教育部に報告することが義務付けられる。

評価は、優秀、良好、合格と不合格という四段階で行われる。まず、各観測ポイントの点数をつ

表2 2003-2008年中国の高等教育研究機関の教育評価の結果

年度	機関数 (校)	優秀		良好		合格		不合格	
		機関数 (校)	比率 (%)	機関数 (校)	比率 (%)	機関数 (校)	比率 (%)	機関数 (所)	比率 (%)
2003	42	20	47.6	19	45.2	3	7.1	0	0.0
2004	54	30	55.6	19	35.2	5	9.3	0	0.0
2005	75	43	57.3	28	37.3	4	5.3	0	0.0
2006	133	100	75.2	24	18.1	9	6.8	0	0.0
2007	198	160	80.8	38	19.2	0	0.0	0	0.0
2008	87	71	81.6	16	18.4	0	0.0	0	0.0
合計	589	353	72.0	128	24.5	21	3.6	0	0.0

出所：http://www.moe.edu.cn/edoas/website18/searchinfo.jsp

ける。その次は、二級指標の評価を行う。優秀と認定されるのは、 $A \geq 15$ 項目、 $C \leq 3$ 項目、(その中に、重要項目 $A \geq 9$ 項目、 $C \leq 1$ 項目)、 $D = 0$ 項目の得点を取得した大学である。しかも、大学のオリジナリティな教育を多数持っていることが要求されている。良好と認定されるのは、 $A + B \geq 15$ 項目、(その中に、重要項目 $A + B \geq 9$ 項目、 $D = 0$ 項目) $D \leq 1$ 項目の大学である。そのほか、大学独自のオリジナリティな項目が含まれていることが必要である。合格と認定されるのは、 $D \leq 3$ 項目、(その中に重要項目 $D \leq 1$ 項目)の大学である。そして、合格基準を下回る大学は、不合格とされる。2003年から2008年にかけて、延べ589校の大学を対象に評価を実施した。その中に、72%は優秀で、24%は良好と判定された。合格と判定されたのは、全体の4%にすぎない。(表2)。

五、学士課程教育評価の成果

第1に、学士課程教育の地位向上につながる。大学の教育に対する評価は教育環境の改善、教育管理の標準化、さらに教育質の向上を大きく促進した。「評価を以て建設を促進し、評価を以て改革を促進し、評価をもって管理を促進し、評価と建設を結合して、建設をより重視する」(中国語:“以评促建, 以评促改, 以评促管, 评建结合, 重在建设”)という評価の原則を充分に実現したものと評価できる。こうした評価を通して、大学側は学士課程教育に対する関心度もさらに高まった。特に評価で取り上げられた人材養成の各具体的な内容と方法を、重点的に発展する傾向が各大学で見られる。実験室などの設備の投入も前よりかなり増加した。また、大学側は、評価基準に基づき、学士課程教育に関する政策を新たに策定する。こうした一連の対策は、学士課程教育の一層の発展に大きく寄与するものと考えられる。

第2に、政府によるマクロ管理の合理化を高める。現在、政府は、依然として高等教育の投入の主体を演じている。高等教育規模の拡大にしたがい、政府による高等教育の投資の増加も伴われている。しかし、急速な発展を遂げた今日の中国においては、教育のみでなく、他の面でも多くの投資が必要であるため、教育に対する投資も限界がある。したがって、限られた予算を最大な効果を発揮するためには、予算の合理的な分配と使用が大きな課題として残されている。学士課程教育に対する評価が、各大学の教育経費の使用状況をより精密的に監査することを可能にしたため、国家の教育投入を最適化する効果が期待されている。

第3に、高等教育に関する情報の公開に寄与する。大学教育は、政府、社会の各面に深くかかわっている。したがって、高等教育機関としては、大学の基本情報を社会に公開して、社会から監督を受ける義務を持っている。一方、社会としても、高等教育機関の教員配置、基礎施設、専門設置などの情報を取得する要請がある。というのは、こうした情報は、学生と保護者が学校と専攻選択をする際の重要情報となっているからである。それ以外に、これらの情報は、企業、あるいは個人が寄付、協力する大学を選定する際にも欠かせない。また、企業側が毎年大卒者を受け入れの意向を決める際にも、こうした資料を依拠している。したがって、評価を通して全面かつ正確に大学の情報を社会に提供することも高等教育評価の目的の一つと位置づけられる。

六、学士課程の教育評価の問題点

第1に、より合理的評価指標の作成が必要である。現在の評価システムの中に、定量的指標が大部分を占めているのに対し、定性的指標はまだ少ない。しかし、教育というのは、量的方法のみでは、正確な評価を下すことが困難である。したがって、定量的指標を使うと同時に、適当に定性的

指標の運用も考慮に入れなければならない。現行の評価指標の中には、インプットに関する項目が多数取り入れられているが、その収益や効果などのアウトプットに関する項目が足りないという欠点が指摘できる。たとえば、インプットの指標の中には、教授、准教授による授業の比率、マルチメディア教育の実施率、バイリンガル教育の実施率、「三性」（総合性、設計性、革新性）実験の比率などの項目が含まれている。評価の際には、こうした指標の到達度を評価するものが多いが、その効果についての検討は極めて不足と言わざるを得ない。教育評価は、教育に対するインプットだけでなく、そのアウトプット、及びそれが大学全体に与えた効果に対しても常に関心を払わなければならない。

また、中国は、地域間の格差のみでなく、学校の設置者などによって、大きな差が存在している。そのため、単一の評価指標では、すべての大学の状況を包括することができない。しかも、単一の評価指標を以て、各種類の大学における学士課程を十把ひとからげに評価するために、しかたがなく、評価指標にあわせて教育活動を行う大学も少なくない。その結果、かえって大学の独自の特色を喪失してしまうという予期せぬ結果を招いた。

第3に、現行の大学類型の分類方法は現状に合わないものが多い。1960年代に確定された高等教育機関の分類は、大きな変化はないまま今日まで援用されてきた。これに基づく、高等教育機関は、総合、師範、民族、工学、農林、財經政法（会計・経済・政治・法律）、医学と体育の8つの類型に分類されている。しかし、この30年の間、各大学には専攻分野の増設と拡大などの改革を通して、総合型の大学へ転換した動きがある。一部の芸術系と医学系の大学以外には、大学を工学、農林などの特定の種類の大学に分類することがもはや困難になった。そのため、同じ総合大学と言いながら、元来の分類によって、各大学の専攻の設置と教育の実態もかなり異なる。ところが、現在使われている教育評価指標は、重点大学、スポーツ系、芸術系大学に対しては、一部独自の指標を用いるが、それ以外の大学に対しては、すべて同一の指標を使っている。したがって、現状に合うような高等教育機関の分類の作成は、より精確な評価を行う重要な条件となっている。

第4に、実際より高い評価は、大学と社会を間違った方向に導く恐れがある。現行の評価システムでは、「優秀、良好、合格、不合格」という四段階を設定している。各大学は、「優秀」の評価の獲得をめぐり、激しい競争を繰り広げている。大学及び所在する地方政府も「優秀」の獲得を唯一の目標と見なしている。「良好」あるいは「合格」は、即ちその大学の学士課程教育の不合格を意味していると見ている学校が多い。この見方は、評価の本来の目的と一致していないだけでなく、大学教育の改善と向上にもプラスにはならない。

アカンタビリティの実施と強化に従い、大学に対する政府の評価活動がますます頻繁になっている。高等教育の大衆化時代に突入した今日において、こうした評価は高等教育の質を保障するうえに果たす効果がさらに高まる一方、問題も数多く存在している。実践の中で、評価システムの改善が大きな課題である。

参考文献

- [1] 劉尧, 2005(5), 「中国高等教育評估的歷史与現狀述評」, 『高教發展与評估』, 37-43.
- [2] 張志英, 張彦通, 2005(2), 「高校本科教学工作評估的分析与思考」, 『中国管理科学』, 136-140.
- [3] 嚴新平, 彭鵬, 2007(1), 「对中国高等学校教学工作水平評估的幾点思考」, 『高教發展与評估』.
- [4] 教育部办公厅, 2004-8-12, 「教育部办公厅关于印發《普通高等学校本科教学工作水平評估方案(試行)》的通知」, 教高厅[2004]21号.
- [5] 教育部办公厅, 2006-9-4, 「教育部办公厅关于印發《<普通高等学校評估教学工作水平評估方案

中国における学士課程教育の評価について

(試行) >对部分重点建設高等学校及体育類, 芸術類高等学校評估指標調整的說明》的通知」, 教高
庁函[2006]35号.